

## 「主体的再編成」をどうとらえるか

宮城教育大学 菅野 正

(1) きわめて一般的には、主体のかわらない人間生活というものはありえない。人間生活の主体性が云々されるのは、いつも特定の歴史的、社会的条件のもとにおいてである。そして「主体」というものがいきいきと認識され、自己の行動の源泉となりうるのは、いつも「客体」との対抗関係においてである。

だから今日の問題として村落生活の主体的再編成を問題とするとすれば、①今日の農民生活を規定している客観的条件の歴史段階的性格の分析がまず必要、②それに対する農民主体のかわり方の「方向性」

が追求されねばなるまい。(無方向の主体性というものは観念的にはありえても、現実にはありえない)

こうして主体的再編成とは、何等かの形で村落生活の変革を志向するものであり(必ずしも大げさなものとは限らない)、その変革志向を、客観的、社会的条件にぶっつけて、そこから何かを、何らかの方向に生み出そうとするものであろう。この意味で「主体的再編成」の問題は、客観的条件をどう認識するかの問題、および自己の主体をそれにかかわらしめて、どの方向に生活の活路を求めようとするのかという「接点」と「方向」の問題をぬきにしては成立しないだろう。

(2) 村研の主題は「村落生活の変化と現状」であり、過去の歴史各段階(近代以降)の村落生活をも問題とするのか、それとも今日の段階だけに問題を限定するのかが一つの問題点だろう。過去の歴史各段階、各地域においてたしかに農民生活は主体的に営まれてきた。しかしそれは客観的体制条件のつよい規定性のもとにおいてであった。だからこそ、農民生活の主体性は、歴史的、地域的にかなり異ったものであったのである。その歴史的経過を概括的にでもたどれば、今日の農民生活および客観的条件の特殊性が一応はつきりしてくる筈だし、今日提起されている「主体的再編成」の歴史的性格と位置づけもある程度はつきりしてくるのではないか。そのうえで、今日、村落生活の「主体的再編成」を問うことの客観的意味も問われなければならない。

(3) なお蛇足だが、村落生活の「生活」とは、都市社会学の「生活構造論」とは違ったものとして、すなわち農民生活のもっとも基底をなす「生産活動」をふくむものとしてとらえるべきである。そうでないと、農民「生活」の特殊性、つまり、そこで農民生活の主体性が問われる一番中心的なものが失われるからである。これは村研においては当然のことであり、蛇足である。